

史遊サロンの通信

No.254号
平成28年
9月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

韓国・破綻した「均衡者外交」 オリンピックピックまで不振に

やっと涼しくなった。大型台風も南下・北上そして左折、変な夏であった。お元気ですか。

朝早く目覚めるので、結構オリンピックを見た。やはり日本の逆転劇に心が躍る。

ついでに韓国のオリンピックニュースも見るが、すっかり意気消沈していて、その様子は最近の政治や経済とそっくりである。

無理もない。一九八八年のソウル大会以来、七回のオリンピックで、韓国は十位以内に六回も入ったが、日本は一回しか入っていない。

ところが今回は、日本のメダル数四十一個に対して韓国は半数の二十一個に過ぎず、立場が完全に逆転している。かつて男子マラソンの金・銀メダル国であった韓国は、リオでは百四十名の完走者中、百三十一位と百三十

八位。カンボジアに国籍を移して出場した「三十九歳の芸能人・猫ひろし」の百三十九位と最下位争いをする惨憺たる成績であった。

政治面では、せっかく朴槿恵大統領が、北天安門で習近平主席と腕を組み、アジアインフラ投資銀行に参加して、中国のご機嫌を取っていたのに、北朝鮮核ミサイル問題では完全に裏切られ、執拗にこばみ続けてきた米軍のサード(終末高高度防衛)構想を、いきなり認めざるを得なくなった。決定は正解であろうが、未熟な外交である。

面子を潰された中国は、いきり立って、韓国を属国扱いし始めた。王魏外相は「外交儀礼」さえ無視した無礼な態度で韓国に臨み、せっかく獲得したアジアインフラ投資銀行の副総裁の座も取り上げ、マスコミを総動員し

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の九月十七日です。会場は定例の銀座ルノール八重洲北口会議室。史遊サロンに紹介された話題やオリンピックなどを楽しみましょう。
なお、十一月の史遊サロンも予定通りの第三土曜日の十一月十九日です。

て「韓国たたき」を演出し、韓国を震い上がらせている。中国と腕を組み、北朝鮮に圧力をかけ、ついでに「日本たたき」を図ろうとした朴槿恵の意図は完全に崩壊し、いまや「慰安婦問題」などと言ってられない。

外貨も豊富になって、もはや日本との通貨スワップ協定など不必要と超高姿勢であったが、現スワップ協定先の過半を占める中国がいつ急変するか分からない状況の中で、日本と和解し、再度スワップ協定を結ぶしか道はないのである。

そんな風になることは、二年前に『まんじ』に「均衡者外交・あるいはポーランドと韓国」という雑文を書き、昨年末には「史遊会」でも講演した。日米が危惧するなかで、韓国が

「均衡者外交」を気取り、中国に近づく様子が、第一次世界大戦後、やっと祖国を回復してもらったポーランドが、ナチスとソ連を天秤にかけて「均衡者外交」を進め、再び国が分割された歴史とあまりにも良く似ていたからである。

絶対に手を握るはずのないナチスとソ連が秘密裏にポーランドの分割を決めたために第二次世界大戦は始まった。

ポーランドは、台頭する独ナチスへの防衛策としてソ連と不可侵条約を結びながら、フランスに対する不信からナチスにも近づき、ヒットラーの策にはまってしまい不可侵条約を結んだ。

韓国は、北朝鮮に対する恐怖や日本に対する不信から、体制の異なる中国・ロシアに近づき、右往左往しながら、結局、日米と組むしかない現実を味わっている。

中国は面子をつぶされたことを口実に、韓国に対する宗主国意識を丸出しにして本音を剥き出し韓国に迫っている。ナチスとそっくりである。韓国は、日米と組む以外の方法はないのである。回り道をし過ぎた。

経済面では、最大の輸出先である中国が、過剰生産に苦しみながら、韓国との競合分野

で力を付けてしまい、韓国は先行き真つ暗である。若者達の失業率は十パーセントほどで過去最悪であるが、この統計にはニートが入っていない。ニートとは若年層で「働かないばかりか、働こうともしない人」を意味するらしいが、超高学歴の韓国で、ニート比率が四十三パーセントにも達し、経済が破綻したギリシャの二十八パーセントよりも高い。

ところでオリンピックを見ていて気がついたことは、チャイナ表示である。中国をチャイナと言うのは常識であるが、語源は「清」である。

日本では「支那」は差別用語であるが、今や中国は、おおっぴらに「清」にお里帰りしている。「国際法」など頭から無視して、南シナ海や東シナ海を中国の領海と主張しているばかりではなく、チベット、ウイグル、内モンゴル、台湾はもちろん、韓国さえも中国領土だとの意識を強烈に示し始めた。それは「清」の領土だったからである。

最後に、史遊サロンの状況を簡単にお知らせする。出席者数は、三月の十九名は別格として、五月の十二名、七月の十三名である。

史遊サロンを通じての出版企画も六〇七件ほどになりそうである。無理をせず、気ままの会として、続けたい。(新井宏)

称徳天皇と嶋足

平山 善之

牡鹿連嶋足という男がいた。奈良時代の末のころである。この男、陸奥国牡鹿郡の出身で丸子氏と名乗る一族に属した。丸子氏は、蝦夷と考えられてきたが、近年の研究では上総国から牡鹿に移住して来たというのが通説である。

丸子氏は牡鹿郡きつての実力者で、郡の大領即ち郡長であった。天平勝宝五(七五三)年、牡鹿連という姓を授かる。

当時、このクラスの子弟は成人すると都へ上り、官人として勤務し、帰郷後地方官吏につくならわしがあった。嶋足も天平の末頃奈良へ上り授刀舎人に任じられたと推定される。位は大初位下、三十ある位階の内二十八番目であった。

この男は、延暦二(七八三)年正月に死んだが年齢は定かではない。五十代半ばと推定される。死んだ時は正四位上道嶋宿祢嶋足と言った。三十階の七番目だから、三〇年間で二一階級上がったことになる。続日本紀の卒伝によると、

「乙酉、正四位上道嶋宿祢嶋足卒しぬ。

嶋足は、本の姓牡鹿連にして、陸奥国牡鹿郡の人なり。体貌雄壯、驍武にして馳射を善くす。宝子中に授刀将曹に任ぜらる。八年、恵美訓儒麻呂が勅使をおびやかせしとき、嶋足と将監坂上苺田麻呂と詔を奉けたまわりて疾く馳せ、射てこれを殺す。功を以て擢でて従四位下勲二等を授け、姓宿祢を賜い、授刀少将兼相模守に補す。中将に転りて、本の姓を改めて道嶋宿祢と賜う。尋ぎて正四位上を加えられ、内廐頭、下総・播磨等の守を歴たり。」

仲麻呂の乱(恵美押勝の乱)の時、孝謙上皇は危うくこれを鎮圧し、称徳天皇として位に復した。嶋足の功がよほど嬉しかったのであろう、異例の昇格をさせる。従七位上授刀将曹を従四位下授刀少将にしたのだから若手将校がいきなり師団長になったようなもので

ある。姓も連から宿祢に昇格、苗字も牡鹿という郡名から、道嶋という国名(道奥)に因んだものに格上げされた。

この異例の扱いが意味するところはなにか? 単に功績を賞したわけではない。

称徳天皇は本気で道鏡に天皇位を譲るつもりであった。彼を溺愛していたからか、他の天武系諸皇子にウンザリしていた為か、多分両方だったのではないか。

称徳天皇は道鏡を法王に任じ(七六六・一〇)「法王宮職」を新設し(七六七・三)大臣以下を法王に拝賀せしめ(七六九・二)、弓削里に由義宮を造営して西京と称し、河内国を河内職に変更した(七六九・一〇)。

いずれも道鏡が皇位を嗣ぐことを前提としている。しかし、宮中の空気は圧倒的に反道鏡である。そこで、称徳天皇は武力が必要と思っただであらう。武力とは、既存勢力と何のしがらみの無い、まして藤原氏など在京貴族一門出身ではない、そして強い武人を味方を持つことだ。坂上苺田麻呂か牡鹿連嶋足か? 苺田麻呂は渡来系ではあるが、既存勢力……。こう考え来った時、称徳天皇には、嶋足こそ自分の懐刀として役立つ唯一の臣と思えたの

ではないか。自分より一回り年下の、地方出身の男は自分を裏切ることあるまい。称徳天皇は嶋足の位階を破格に引き上げた。

しかし、その意を果たせず五三歳で病没してしまう。或いは藤原永手辺りが一服盛ったかもしれない。この時嶋足は近衛中将であったが折から陸奥国で起きた蝦夷の反乱調査を名目に陸奥国に追い払われていた。後継は藤原一門が一致して推した白壁王が光仁天皇として即位した。白壁王は六二歳の高齢、藤原氏の狙いはその子山部王(後に桓武天皇)であった。平安時代以降の藤原一門の繁栄はその帰結である。

余談ながら、称徳天皇が道鏡に譲位しようとしたことは今から見ると奇異な感じがするが、私は当時は天皇位というものが確立したものでなかった、万世一系などとは誰も考えていなかったことを示しているように思われる。天武天皇以前は伝説・神話の部分が多し、継体天皇が北陸方面からやって来て大和の大王位を篡奪したことは記憶にも新しく違ったに違いない。

旧東海道 “小夜の中山” を歩く

千坂 精一

太田精一さんの近著『誠忠の茶園』を読んでいたら現在の国道一号線ではなく旧東海道の山の道 “小夜の中山” を歩いたときのことを思い出した。

取材ノートを調べてみたら平成八年六月とあるからもう二十年もまえのことになる。

そのころ史遊会のなかに、一泊二日で史蹟めぐりをするバス旅と、原則日帰りで近県の峠路を歩く、二つのグループ活動があった。

これはその峠路を歩くほうの話である。

東海道本線が島田駅を出て大井川を渡ると出発点の金谷駅に着く。

おなじ静岡県内なのだが、江戸時代までは大井川を堺にして島田側が「駿河國」、金谷側が「遠江國」にわかれていた。

金谷から南へ二十キロにおよぶ谷や沢が深く入り込んでいる台地が牧之原で、そこに一万五千ヘクタールといわれるわが国最大の茶畑が広がっている。牧之原茶園である。

牧之原の茶園開拓話は太田さんの著書『誠忠の茶園』を読んでいただくとして、ここから

ら旧東海道の山の道を西へ向かい掛川までの尾根道小夜の中山を歩くことにする。

金谷は江戸から五十三里九丁、京へは七十二里十一丁の場所にある東海道二十四番目の宿場で、大井川の右岸に位置している。

小高いところにある駅舎を出ると、密集した町並とその先の大井川が俯瞰できる。

その金谷の町に背を向けて線路のガードを潜り駅裏を少し昇ると長光寺に出る。むかし一里塚があったというところで芭蕉が詠んだ、道のべの木槿は馬に喰われけり

の句碑が立っている。

そこから全長四百三十メートルの金谷坂を登りきるともうひとつの芭蕉の句碑、

馬に寝て残夢月遠し茶の煙

がある。この坂は石畳に整備されていた。そのさき道端の竹藪を踏み込んだところに武田信玄が高天神城攻めの足場にした諏訪原城跡がある。

諏訪神社が祀られているから信玄が金谷砦にしたあとを諏訪氏の血をひく勝頼が築城したのであろう。

菊川の里を掠めて菊川に架かる四郡橋を渡り、左折して青木坂を登ると久延寺である。

ここから西坂までの約三キロが箱根、鈴鹿とともに東海道三大難所といわれ、西行が、

年たけてまた越ゆべしと思いきや

命なりけり小夜の中山

と詠んだその小夜の中山である。

『海道記』に、

「佐夜の中山にかかる。この山口をしばらく上れば、左に深き谷、右も深谷、一峯長き道は堤の上に似たり。両谷の梢を眼の下に見て、群鳥の囀りを足の下に聞く。谷の両辺はまた山高し」

と紹介しているが、子育て観音を祀る久延寺のさきの峠を越えたところの一里塚からは平坦な道がつづき、なるほど長い堤防の上を歩いている感じで、左も右も一面に茶畑がひろがっているなかに防霜扇風機だけが林立している。

見渡す限り人影はなく、もうすこし早い時季なら雲雀が囀っていたであろうじつに長閑な風景である。

沓掛から坂口を経て西坂の急坂を下り、谷間にあった宿場の日坂に入る。

この二十五番目の宿場は江戸から五十五里二丁だということから、金谷から二里(八キロ)ほど歩いたことになる。

会員出版ニュース (新井記)

史遊会サロン協賛の「出版」が進んでいる一方で、その他にも、会員の出版が続く。

七月の例会では瀧澤中さんの『戦国大名』失敗の研究』と山本鎮雄さんの『目耕録』を紹介した。夏休みに遊びに来た中学生の孫が、瀧澤さんの著書をみんな持ち帰ってしまったが、山本さんの『目耕録』は『まんじ』連載時からユニークな構成に学ぶところが多く、再読した。実に味わいのある本である。

そもそも、史遊会は定職のあるアマチュアで歴史に関する著書のある者が会員条件であったが、その後、会員の「高齢化」も進み、従来の方式の運営が、困難となり、いったん「中締め」し、「史遊会サロン」として、私がいまは運営している。

私の場合、いまでも頼まれて「考古学」絡みの講演をすることが多い。

その場合、大抵、懇親の場が設けられるが、「史遊会」のことが話題になるのが珍しくない。二十年前に史遊会に参加していたとか、柴田弘武さんや平山善之さんのことを良く知っていると、新井さんも「史遊会」の会員だったので等々「史遊会」はかなり有名

団体なのである。中には、地域で「〇〇史遊会」を運営しているという方もいる。

そんな時、「史遊会サロン」への参加を誘ってみようかと思うこともあるが、とりあえず自粛している。

「史遊会」が始まった頃、アマチュアが本を出すのは珍しいことであった。しかし、時代は変わって、誰でも出版できる反面、出版物の売れ行きはどんどん落ち込んでいる。

そんな中で、アマチュアの出版への意味付けも変わってきた。プロ作家でもある三戸岡道夫さん、瀧澤中さん等とは別に、本当の「私家版」を作っている方がいる。

その中でも、とにかく信じられないほど精力的に活動しているのが、中込勝則さんである。今年になってから既に三冊上梓されたが、過去の著書二十五冊と合せるとほぼ三十冊である。

それらの内、私が頂戴したのが十二冊。全て超豪華な手作り「私家版」である。

本作りの経験のある私から見ると、その労力たるや莫大である。だから今までも、頂戴した度に、拙い「感想文」をお届けしてきたが、七月末には、また、まとめて二冊も頂戴した。すぐ、拝読して勉強の成果をご報告するつもりであったが、なにしろ「漢詩」の本

で、ますます円熟した内容に学ぶことが多く、しかも速読は効かない。

そうだ、いつもとは変えて、史遊サロンに感想文を載せよう。

『白楽天(第一編)』『同(第二編)』

中込勝則記(慕史堂文輯②⑧②⑨)
いつもの著書のように、記述は、白楽天の時代背景から始まっている。これが大変勉強になる。

白楽天は科挙の中でも最難関の進士科に合格したエリート官僚だと言う。数年に一度の試験で合格者は多くても二十人、五十歳までに合格すれば「若い」と言われた中で二十九歳で合格している。

白楽天が志向したのは、まず第一に平易な表現であったという。そして、中込さんの次のような持論がうれしい。

……読み手や聞き手のほうから見て、なにをいっているのかを理解するのにくるしむほどむずかしい表現をする人は、その人自体が本当はわかっているのではないか……。本当にものごとがよくわかっている人は、相手の人物・知識の程度をみて、むずかしい事柄をわかりやすくしゃべるものだ。……

その白楽天の詩は『唐詩選』に一首も採られていないというが「だからといって、白楽天の詩の評価が減じられるものではなく……『唐詩選』の価値が劣るわけでもない」と述べている。

当会には「長恨歌」を完全に諳んじている平山さんのような方もいる。また鯨游海さんのように「長恨歌」の八三三言に次ぐ七二八言の漢詩「二宮金次郎」を作った方もいる。

しかし、白楽天が「長恨歌」を作ったのは、同時代ではなく、楊貴妃が安史の乱で殺されたから丁度五十年後である。

こんな調子でだらだら書いていては、とても終わらない。そこで思いついたのは、著書を頂戴した時の中込さんの書状の一部を紹介に代えることである。

……私はこのところ、史遊会の方は、第三土曜日と時刻までが、いま習っている短歌の会と重なることが多く、そちらは幹事をやっている関係で、私が出席しないと会が始められない事情があって史遊会を欠席して申し訳ございません……元気でやっております。

同封いたしましたものは、『杜甫を味わってみませんか』全八編が終わった後、ここ四年にわたって取り組んできた『白楽天』です。やっと第一、二編が出来上がりました。全五編千六百ページ

全体はほぼ書き上げてあるのですが、いざ本にするには細かなところの虫取りが必要で、これが意外と手間がかかり、全体が仕上がるのはいま少し先になるでしょう。

第一編には「長恨歌」、第二編には新樂府中の「売炭翁」、「新豊の臂を折りし翁」など、第三篇には「琵琶行」などの、人口に膾炙した白楽天の代表作が載せてあります。

およそ漢詩に限らず詩歌というものは、作者の心情のほとばしりであると思えば、その作品を生んだ作者の生い立ち、境遇のみならず、その作品が生まれた当時の社会情勢や作者がおかれた環境を知らないと、本当の理解はなかなかできないといえます。

従って本篇には、白楽天の生きた中唐という時代、並びに彼の生涯をできるだけなぞって、どんな環境でその一首一首の詩が生まれたのかわかるようにしたいと思って、かなり長編のものになりました。

もうひとつは、千坂精一さんの『関東管領始末記』である。ちよつと編集集中にミスがあり、完成が遅れているが、間もなく出来上がる。二百頁、二十話に及ぶ大編である。これも著書あとがきがよく纏まっていて、面白いのでそれを転載する。

『関東管領始末記』あとがき

これは宰町時代の足利政権下で東国を支配する鎌倉府の関東管領として君臨した上杉氏の物語である。

私の歴史研究はこの上杉氏の系譜を辿ることからはじまった。

上杉氏は丹波國でおこり、関八州での長い最盛期あと、越後國で終末を迎えている。

それらの地域を訪ね歩いて取朽を繰り返して、史料を収集してきた。

歴史雑誌で上杉氏が絡む特集が企画されるたびに執筆させてくれたので、いつか断片的ながらかなりの量が活字になって残っていた。

それを再取材して穴を埋め、繋げておこうと思いついた。

さいわい『まんじ』の同人なので発表の場はある。

しかも、季刊誌だから三箇月ごとの締切りなので、その都度取材をしては掲載をつづけることができる。

そろそろ寿命の尽きる秒説みに入る年齢なので、はたして完結できるか不安はあったが、未完で終わってもやむなしと覚悟して書きはじめたところ、どうやら脱稿できて寿命の方が余ってしまった……。

以下略